

大山町の牧（まき）に関する地名一考

中葉博文*

はじめに

立山信仰に関係の深い、大山町の大字本宮・原・文殊寺の地の近くには、牧・東黒牧・牧野という「牧（まき）」の付く地名（大字名）がある。

この牧の付く地名は、どのような語義なのか。また、時代的に、薬勢が堂宇を建立したという平安期頃まで、この牧地名は遡ることのできる古い地名なのか。さらには、牧地名は、立山信仰に関係する地名なのか。

今回、この大山町の牧（まき）の付く地名について、今思う私見を述べてみたい。

1 地名用語「牧（まき）」の語義

地名用語の牧（まき）の語義であるが、楠原佑介・溝手理太郎両氏が編集した『地名用語語源辞典』には、「①牧場。②小平坦地にあるものが多く、山でとり巻かれた地の意か。③河流の渦巻。④中世に使用された田地の面積の単位「蒔き」から。（一斗蒔など）⑤同族集団を呼ぶ用語のマキから。⑥「真木」でマキ（樺）などの植物の植生によるものもあるか。⑦丘や山麓をとり巻いたり、川沿いに半円状に連なる集落の名。動詞マク（巻）の連用形マキで「河流、山脚、海岸線などの巻いた所」のこと。⑧動詞マク（撤。蒔）には「散らし落とす」意があり、この連用形から崩崖など「崩壊地形」の例も考えられる。」¹⁾と八つの語義を記し、さらに、楠原氏が編集した『古代地名語源辞典』には、まき（真木）の項目では、「牧のあったところという説もあるが古くから唱えられているが、必ずしも信じられない。むしろ、河の曲流部・山の縁辺の曲がったところなどをいったものであろう。また、樺の生えた地という説もあるが、採りがたい」²⁾とも記している。楠原氏は、この二冊の辞典編集に伴って多くの現地を踏査した結果から、上記⑦の語義である「丘や山麓をとり巻いたり、川沿いに半円状に連なる集落の名。動詞マク（巻）の連用形マキで「河流、山脚、海岸線などの巻いた所」のこと。」

*富山県立立山博物館

が、牧地名の語義では、一番多いケースではないかといっている³⁾。

また、池田末則氏⁴⁾は、牧地名の語義については、「楠原氏等が、編集した辞典類に記されている語義が大方と考えられる。しかし、楠原氏がいう河流、山脚、海岸線などの巻いた所が一番多いということに対しては、どうだろうか。」といっている。池田氏は、「牧の付く地名は、まずは、官私いずれであったかはわからないが、牛馬を養う、いわゆる「牧」であった可能性が先ず考えられる。しかし、牧は、牛馬を飼地に適したところではあろうが、必ずしも牛馬を飼養したとはいえない。『爾雅』に「邑の外、郊外は牧、牧外は野、野外は林」とあるように、古代からある野や原と同じように、むしろ「牧」は「野」や「原」と同様の一字で意味をなす普通名詞で、しかも、地形をあらわす語で、「郊外」と「野原」の間にある地形語ではなかろうか。よって、牧の語義は、「山辺の傾斜平地」ではなかろうか。それが、牧の語義より、むしろ、牛馬の飼育に最適地という牧の景観の方が重要視され、後に、牛馬の飼育地が「牧」と呼称されるようになったのではなかろうか。」といっておられる。さらに、マキ（真樹－聖樹・神木）説もあるが、崇神天皇の和風諡号が「ミマキイリヒコ」からきている。諡号には地名・地形を冠した例が少なくない。ミマキのマキは地形語と考えられる。奈良県の「牧」関係例にすれば、同県の宇陀・宇智郡の傾斜地（牧・牧谷・牧野・牧山・内牧・楡牧など）に多く分布するともいっておられる。

牧（まき）は、池田氏がいうように、もともと「山辺の傾斜平地、傾斜地」を示す地形語であったが、その語義よりも、むしろ、牛馬を飼育するのに最適地という牧の景観が主となり、辞典類が一般にいうように、牧とは、「馬・牛を放牧し、その飼育や増殖をはかるために設定された土地のことをいうようになった。牧（まき）は「もく」とも読む。『和名類聚抄』では「むろき」と訓じている。柵や溝、あるいは河川などの自然地形を利用し、周囲から区画されていた。」⁵⁾という広義による「牧」に対する語義となっていたのではなかろうか。牛・馬を飼育する場合は、それぞれの地域的条件はあると思われるが、何より適度の水を確保できることが絶対必要である。牧地名には、河川や池など水辺の近くにも牧川・牧河・牧池など牧の付く地名があるのは、この意からかもしれない。

2 大山町の牧（まき）の付く地名

大山町には、大字名で牧・東黒牧・牧野という牧（まき）の付く地名がある。

(1) 牧（まき）

単に、牧という大字名は、大山町を流れる常願寺川左岸の段丘上にあり、西は同町大字松木、南東は同町大字才覚地に接している。古くは西側の大字松木とは、同一村であったといわれる。同地の地名由来については、「中世に牧場が存在したものと思われる。牧とは〔馬置〕からついたとする説。富山県にも多い真木は真木が立つと云って激流の巻き返しのところを云うらしい。…マキの意味は航海の呪術に使用する横で桧、楠、杉など良質の木材を云うらしい。牧の地名は馬置きか、あるいは横のような気がしてならない。」と、伝えられている⁶¹⁾。

(2) 東黒牧（ひがしくろまき）

東黒牧は、大山町を流れる熊野川左岸の南側に位置し、東側は同町大字文殊寺、南側は同町布目や福沢に接し、北側は現在、富山市西黒牧と相対する所である。江戸初期においては、現在の富山市西黒牧を含め、同地の東黒牧は、加賀藩領黒牧村という一村であった。それが、万治3年（1660）の領地替により、熊野川左岸に位置する現在の大山町東黒牧は、加賀藩領黒牧村となり、同川右岸の現在の富山市西黒牧は、富山藩黒牧村となった。その頃から、同川の左岸を東黒牧、右岸を西黒牧と通称され、明治5年に、同じ黒牧を区別するために、同川左岸を東黒牧村（大山町地内）、右岸を西黒牧村（富山市内）と改称された⁷¹⁾。

黒牧の地名については、「崇神天皇の時、北陸道へ派遣された四道將軍の一人大彦命は、この地の黒牧彦が農耕に秀でていることから、彼に早稲比古の名を与えた。そこで黒牧彦の功を長く伝えるためにその名を地名に残した」という伝承がある⁸¹⁾。

また、明治期の文献に、「按ズルニ北陸地方ハ往古陸羽地方ト共ニ我国ニ於ケル産馬地ナリシコトハ疑ヲ容レサルナリ古史神代ノ條ニ「越根別ノシラカヘニ牛馬ノ牧ヲ開ク」トアリ下ツテ又「陸羽ヨリ牛数十頭越ヨリ馬數十匹ヲ進ム」トモアリテ其時代ヨリ既ニ牧場ヲ設ケ名馬ヲ産出セシニ似タリ崇神天皇ノ御代ニ及ヒ四道將軍ノ一人大彦命ノ北陸ヘ差遣セラルルヤ今ノ婦負郡ニ黒牧彦ト称スル篤農者アリ大彦命ノ副將トシテ越中ニ留レル推搯彦ハ之ヲ表彰シテ同人ノ居村ヲ黒牧村ト名ツケタリ、黒牧ノ名称ガ畜産ニ関係アルハ深ク味フヘキコトニアラスヤ、…」と、黒牧とは、牛馬など畜産に関する地名と記している⁹¹⁾。

(3) 牧野（まきの）

牧野は、大山町を流れる熊野川支流黒川の左岸の段丘斜面（山麓緩斜地）にあり、南と東は同町日尾、北と西は同町福沢と接している。同地の地名由来は、「山麓の緩斜面が牧（牧場）として利用されたことによる。」といわれている¹⁰⁾。

牧野の「野（の）」の語義については、「山に対する野原。人里に対して荒野。人家に

対して田畑。緩傾斜地。単に山のこと。放牧地。草むら。墓地。火葬場。入会地の草刈地。沼や湿地などの意」といわれている¹⁴⁾。野(の)の語義の中には、「野」のみで、放牧地の意もある。

大山町の牧(まき)の付く地名について、その位置と現在、説かれている由來說について換言的に記してみたが、地名由来については、同町大字牧は、「馬置や植物の槓」からの命名ではなかろうかという一説もあるが、これら牧の付く地名(牧・東黒牧・牧野)には、いずれも、必ず「牧場」に由来するのではなかろうかと記している¹⁵⁾。

3 大山町の牧(まき)の付く地名と考古遺物

大山町の牧(まき)の付く地名(牧・東黒牧・牧野)周辺の景観や考古遺物より、牧の地名について探してみたい。

大字牧は、立山町との間を流れる常願寺川上流に位置し、同川の河岸段丘が形成された高位段丘の標高500~600mの粟菜野台地近くに位置する台地上の地である。

考古遺物は同地からはまだ出土はしていないが、すぐ近くの大字本宮からは、花切遺跡や原遺跡などから、縄文時代の土器や竪穴住居跡などが出土している¹⁶⁾。この頃から人々が、台地上に住んでいたことが窺える。

大字牧を流れる常願寺川沿いのわずかな平地は、同川の氾濫による危険があり、また、同地の背後にある急峻な山地も人々の居住には適さない。やはり、同川に面する台地上が、比較的平坦地で住みやすい地であったのであろう。大字牧の「牧」の語義は、楠原氏がいう牧の語義では、①・②・⑥・⑦などが考えられる¹⁴⁾。

同地は、池田氏がいう「山辺の傾斜平地、傾斜地」の意が、最も同地のようすを現し、牛馬を飼育するのに最適地という「牧」(牧場)を設置するのに、好条件な地のような気がする。

大字東黒牧や大字牧野においては、大字牧地内を流れる常願寺川を下った下位段丘の上野段丘から、さらに西側に連なる台地上に位置する所である。その台地の片側を、神通川の支流熊野川や、熊野川の支流である黒川が流れる。大字東黒牧は、地形的に東黒牧上野丘陵とも呼び、東西約2km、南北200~600mの東西に細い台地上にある。また、同地は標高140~200m程で、周囲の比高差40~80mの崖地もある所である¹⁵⁾。

同地には、東黒牧上野遺跡があり、また、同地周辺には、上野・大川寺・大川寺西・中滝山・文殊寺東・文殊寺稗田・東福沢・一ノ瀬などの遺跡がある。大山町では最も多く遺跡が立地している所である。これら遺跡の中でも、東黒牧上遺跡、文殊寺稗田遺

跡、東福沢遺跡などが古くから周知されていた。表1からもわかるように、東黒牧上野遺跡周辺には、多くの遺跡がある。東黒牧上野遺跡からは、旧石器・縄文・古墳・平安時代の遺物が出土している¹⁶⁾。同遺跡からは、縄文時代の29棟の住居跡が発掘され、大規模な集落が形成されていたことが明らかになっている。同町の縄文時代の遺跡のほとんどは、常願寺川の両岸に発達した河岸段丘の平坦面や緩斜面上に分布するという。遺跡の性格は、今のところ不明であるが、稲作には不便と思われる台地上では、稲作以外の何らかの開発が始められたことが予想されるといわれるが、未だ明らかではない。東黒牧上野台地では、台地の周囲が急な崖であり、遺跡の中には、堀も発見されている¹⁷⁾。この堀は、牛馬の水の確保や牛馬が逃げないように柵の役割とは考えられないだろうか¹⁸⁾。

東黒牧や牧野の位置する台地は、大字牧同様に牛や馬を放牧する牧場としての利用も可能な地であったと考えられる。また、東黒牧上野遺跡をはじめ大山町の広範囲の遺跡から平安時代の土師器・須恵器が採集されている。平安時代には、すでに、この大字東黒牧や牧野の位置する台地上では、人々は何らかの活動を盛んにしていたことを示している¹⁹⁾。

4 『延喜式』にみる越中国の貢納物—蘇・牛皮と大山町東黒牧（黒牧）

『延喜式』という平安時代に記された文書²⁰⁾に、当時の越中国から京の都へ貢納された品々が記載されている。その記載事項の中に、「牧場」とつながりがあると思われる「蘇」と「牛皮」が見える。

蘇とは、『延喜式』民部省式によると、全国57ヶ国を地域別に6班に分けて、6年ごとに当番国は、その年の11月以前に貢進すべきものと定めている²¹⁾。また、同規定に、「乳大一斗」を煎じて、「蘇大一升」を得るとも記され²²⁾、今日でいう乳製品であった。当時、蘇は、食用・薬用・供饌用として作られ、諸国から貢進された蘇を中務省被管の内蔵寮に収蔵されたという²³⁾。

越中国も、次の『延喜式』の「諸国貢蘇番次」の規定に見えるように、能登や越後国国らと同じ、第四班（番）で、越中国は辰、戌年の11月までに、十壺の蘇を貢納すべきものとされた。

能登国九壺（三口各大一升六口各小一升） 因幡国十一壺（三口各大一升八口各小一升）
越中国十壺（四口各大一升六口各小一升） 伯耆国十一壺（三口各大一升八口各小一升）
越後国十一壺（四口各大一升七口各小一升） 出雲国十一壺（三口各大一升八口各小一升）

丹波国八壺（二口各大一升六口各小一升） 岩見国八壺（二口各大一升六口各小一升）
但馬国十一壺（三口各大一升 八口各小一升） 右十箇国為第四番（辰戌年）

同規定から、蘇の貢進国には造蘇のための乳牛が飼われており、乳牛のための「牧場」が整備されていたものと考えられ、越中国にも「牧場」があったのでなかろうか²⁹¹。

日本において公的な「牧」の制度は、八世紀初に律令制の「牧」制度²⁹²としてはじめて成立した。文武天皇4年（700）3月、「牧」の設定が諸国に命じられた²⁹³。それから、7年後には23箇所に「牧」が設定された²⁹⁴。この規定には、越中国に公的な「牧」が設定されてはいない。

『富山県の畜産』に、『延喜式』兵部省に越中国の駅馬（はゆま）は坂本、川合、亘理、白城、磐瀬、水橋、布勢各五疋、佐味八疋、伝馬（つたはりうま）は砺波、射水、婦負、新川郡各五疋を定られたり、而して駅馬は皆越中の郷名下に属し、駅伝馬の多くは牝馬を以て之に充て牝馬は主として耕作に使用したものの様である。²⁹⁵と記すように、当時は、越中国内の四郡のどこかの私の馬牧から馬を調達したと考えられる。

牛については、『延喜式』兵部省によれば、北陸道牛牧を設置してある国はない。

『続日本紀』の淳仁天皇、天平宝字5年10月10日（辛酉の條）に、「東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海などの道諸に命じて、牛の角七千八百隻を貢上させた。さきに高元度が唐から帰国する日、皇帝が元度に対し、「この頃安祿山の乱によって、兵器を多く失った。今、弓を作ろうとして方々に牛の角を求めている。聞くところでは、故国では牛角が沢山あるという。卿が帰国したら、国のために牛角を求めて、死者を派遣するついでに当方に贈れ」と語った。そのためこれの備蓄がなされた。」とある²⁹⁶。真意の程はわからないが、「聞くところでは、故国に牛角沢山あると」我国における当時の牛飼養の盛なる有様が、唐にまで知られていたと考えられる。勿論、七千八百隻の中、その幾割かは官の牛牧より得られたる牛角であったと思われるであろう。

こうした牛角は、私畜の牛より得られたものと、この公の牛牧設置国より生産されたものと推定できるのではなかろうか。また、条文に見える北陸道に属する越中国において私畜の牛が飼育されていたことは確かであろう。

さらに、『延喜式』の民部式に表れている諸国の交易雑物の條を見れば³⁰⁰、越中国

甲斐国	履料牛皮三張	越前国	履料牛皮六張
相模国	履料牛皮十二枚	加賀国	履料牛皮二張
武蔵国	履料牛皮二枚	能登国	履料牛皮四張
常陸国	履料牛皮九張	越中国	履料牛皮四張
信濃国	履料牛皮三張	越後国	履料牛皮八張

表1 大山町東黒牧上野遺跡周辺の遺跡について

No	遺 跡 名	時 代 ・ 遺 物	遺跡の種類
1	東黒牧上野遺跡	旧石器・縄文(早期・中期・後期・晩期)・古墳・平安	集落跡、散布地
2	東福沢遺跡	縄文(中期)	散布地
3	文殊寺稗田遺跡	縄文(早期・前期・中期・後期)・平安	散布地
4	徳林寺裏遺跡	旧石器・縄文(中期)・平安	散布地
5	東黒牧上野塚	中世～近世	塚
6	文殊寺稗田窯跡	近世	越中瀬戸焼窯跡
7	日蓮坊横穴	中世～近世・須恵器(珠洲焼か)	炭焼窯跡
8	勝福寺墓地	中世・近世・五輪塔・板碑	墓地
9	金岡家墓地	中世・五輪塔・宝きよ印塔・珠洲焼・白磁	墓地
10	伝桃井直常の墓	中世・五輪塔・珠洲焼	墓地
11	津毛城跡	中世	城跡
12	武部神社前遺跡	中世・珠洲焼・越前焼・土師質小皿・五輪塔・板碑	散布地・墓地
13	東黒牧上野窯跡	近代～現代・陶器・瓦	窯跡

表2 上新川郡の家畜頭数及飼養戸数町村別

大正三年十二月三十一日

町 村 名	頭 数					飼養戸数	備考
	牛	馬	豚	山 羊	計		
堀 川 村	35	149	2		186	140	
蛭 川 村		68			68	68	
新 保 村		127			127	124	
大 久 保 村	1	141			142	126	
大 澤 野 村	9	98			107	104	
下 夕 村	70	118			188	171	
船 崎 村	12	119			131	124	
福 澤 村	22	141			163	142	●
熊 野 村		160			160	153	
大 庄 村		124			124	119	
月 岡 村	7	105			112	99	●
上 籠 村	4	49			53	53	
大 山 村	1	196			197	175	●
太 田 村	1	198			199	196	
山 室 村	9	147			156	144	
新 庄 村	16	44			60	42	
島 村		84			84	73	
針 原 村		132			132	124	
濱 黒 崎 村		41			41	41	
大 廣 田 村		124			124	122	
東 岩 瀬 村	14	27			41	28	
豊 田 村		109			109	106	
廣 田 村		49			49	48	
奥 田 村	8	62		40	110	62	
合 計	209	2,612	2	40	2,863	2,584	

※ 表内の●印が該当する所を示す。

上野国 履料牛皮廿張 太宰府 履料牛皮廿四張
下野国 履料牛皮七張

とある。

『延喜式』兵部省に見える牛牧を設置してある国は、『同式』の諸国の交易雑物の条に見えるのは、相模、武蔵国及び太宰府にすぎない。牛牧を設置しないその他の国においても、牛皮が交易物として貢進されている。公牧以外の私牧、いうなれば、民間における牛の飼養が、盛んであったことは認めなければならないのではなからうか。

『富山県の畜産』³¹⁾に、「北陸地方は往古陸羽地方と共に我が国における畜産地であったことは、「上記抄譯」古史神代の条に「越根別（こしねわけ）のしらかひに牛馬の牧を開く」とあり、又下って「陸羽より牛数十頭北越より馬数十匹を進む」とあり、此の越根別とは若狭、越前、加賀、能登、越中、越後の総称であって其の時代牧場の設けられた事実を識る。」とも記す。

その後、戦国時代まで続いた貴族・寺社等の権門勢家による荘園制度においても、私牧が盛んであったことが窺える。康平8年（1065）7月の越中国司解に、「権勢の家が制符を用いず、好んで庄牧を立てる」と見える。この条から貴族・大寺院らは、本来の目的からはなれて、牧や柚を切り開き、開墾して耕地化し、さらに、これを荘園化していった³²⁾ことから、越中国の「牧」は、上代から戦国時代において、国内のどこかで當なまれて、牛馬の牧畜については相当盛んであったといわれている³³⁾。

5 大山町の「牧」での飼育形態

大山町の牧・東黒牧³⁴⁾・牧野の地は、「牧場」として利用するのに十分可能な地である。

かって、同地には「牧」があり、特に、私牧が行われていたのかもしれない³⁵⁾。

では、飼育形態の面からさらに考察すれば、例えば、生産を主たる目的の牧では、古代においては、夏から秋は限定放牧、冬から春は自由放牧というのが基本形態であった。限定放牧については、牧の周囲には、牧柵（＝牧柵）と柵（＝溝）などの囲い施設が設けられており、自由放牧については、山口英男氏は、「牧周辺の山野は、牧馬の自由放牧の範囲であった。自由放牧地域は、海・山や丘陵・河川などの自然の境界に応じておのずと一定の範囲に定まるものであり、牧の設置自体がそうした地形を考えてなされた筈である。したがって、莫大な労力を投下してその全体を囲う施設を設けることはなかったろう。ただ、自然の境界を一部補うことで効率的な条件が得られるならば、部分的

に土塁・堀などが設けられた可能性はある。自由放牧範囲に含まれる集落や耕作地などでは、牧馬の立ち入りを制限したい箇所に馬柵などを設置されたであろう。」³⁶⁹と、自由放牧について記している。

また、奈良時代の放牧について安田初雄氏は、「民間ではひろく自由放牧が行われ、そのため馬から作物を保護するために耕地の周囲にませ垣(馬柵)が造られていたのにならして、官牧では置付放牧を主体とした牧飼で、一部で温暖季放牧も行われていたことを明らかにしている。氏によれば、いわゆる一定の区画領域をもつ放牧地、すなわち牧という形態は官牧においてとられたものであるという。そんな官牧内の放牧も、令文では一〇〇疋の馬に牧子がわずか二人しか配置されておらず(廐牧令牧每牧条)、軍団や中央政府に供給予定の馬以外は、ほとんど自然の群のままに放置する自然放牧であったらしい³⁷¹。一志茂樹氏は、「牧は放牧地域・増殖地域・牧司居住地域等から構成されていた。」³⁸⁰と指摘された。

古代における越中国の飼育形態は、広く自由放牧が行われていたのだろう。

牧・東黒牧・牧野の地は、台地上に立地し、しかも、台地の一方が崖となり境界(柵)の役割をも担える。山口氏がいう自由放牧地域としては、地形状況をうまく利用できる自由放牧には最適な地ではなかろうか。また、上記したが、同地域の遺跡から堀が出土したという。この堀についての役割は、まだ、詳細には明らかになっていない。上記でも指摘したが、牛馬が逃げないように柵の役割とは考えられないだろうか。この3大字の地及び周辺遺跡より、馬に関する馬歯などの出土は、現在は発見されていない³⁷¹。

一志氏が、牧の地域構成について指摘しているように、古代の牧の構成は、役割によって分かれていたようである。

この3大字の「牧」においても、かつては牧の地域構成が分かれていたのかも知れない。馬に関するものが、出土はしていないが、「放牧地域」の意が、地名に反映されたのだろうか。

ちなみに、表2からもわかるように、牧(旧大山村)・東黒牧(旧福沢村)・牧野(旧福沢村)では、牛や馬を飼育し、中でも馬を多く飼育していることから読みとれる。三大字は、大正期においても「牧畜」が盛んな地であったことが窺える¹⁰⁾。

6 おわりに

大山町の牧に関する地名は、地元、大山町で説かれている「馬置や植物の柵」からの命名も考えられるとも思われるが、「牧場」に関する地名ではなかろうか。恩師である

池田氏が、奈良県の牧地名を例に唱えられている地名用語「牧」は、もともと地形語で「山辺の傾斜平地」のことで、この地形語である「牧」の立地する景観（牛馬の飼育に最適地という景観。）の方が、重要視され、後に「牧」と呼ばれるようになったのではなかろうかといわれる。大山町の牧に関する地名も、池田氏の見解と同様な意より命名されたように思われる。

「牧」地名は、「野」・「原」の地名用語同様に、古代に見える地名である。同町の牧地名は、いつの時代に命名されたか未だははっきりしない。しかし、今回の検討で、古代から語り継がれてきているそんな匂いを感じさせる地名のような気がする。

県内には、牧の付く地名がいくつかある。また、古代に関する文献を見ているとその当時の、牧場に関することや、当時の越中国の政治・社会環境面からのアプローチなど、まだまだ、十分検討しなければならない。

今回は、大山町の牧に関する地名について、日頃の研究ノートから若干記したもので、いわば、現在の私見を述べた中間報告である。

本稿をまとめるにあたり、多くの方々より資料提供やご教示をいただいた感謝申し上げます。

註

- 1)・3)・14) 楠原佑介・溝手理太郎両氏編『地名用語源辞典』（東京堂出版 1982.4）の「まき」は583頁。
- 2) 楠原佑介編『古代地名語源辞典』（東京堂出版 1981.9）284～285頁。
- 4) 恩師である同氏より直接、「牧（まき）」について多くのご教示を受けた。同氏は、奈良県内の「牧」地名を例に、例えば、『上牧町史』（上牧町 1977.12）、『地名伝承論—大和古代地名辞典—』（名著出版 1992.10）、『奈良県史 第十四巻 地名』（名著出版 1985.11）などの刊行物内に「牧」に関する地名論考を記している。今回、筆者も随分と参考にした。
- 5) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典』（吉川弘文館 1994.4）27頁を参考及び引用。
- 6)・7)・8)・10)・12)・19)・24)・34)・35) 『大山町史』（大山町 1964.11）、角川日本地名大辞典編纂委員会編『角川日本地名大辞典 16 富山県』（角川書店 1979.10）『富山県の地名』（平凡社 1994.7）、大山の歴史編纂委員会編『大山の歴史』（大山町 1992.3）、大山町自治振興連合会『ふるさと再発見Ⅱ—地名の由来の考察—』など、大山町の牧の付く地名について記してあるところを参考及び引用した。

- 9) 『富山県産牛馬沿革誌』（富山県 明治40年）2頁。
- 11) 註2）と同書。「の（野）」は同書の509～510頁。
- 13) 大山の歴史編纂委員会編『大山の歴史』（大山町 1992.3）24頁。
- 15)・17) ①富山県埋蔵文化財センター『富山県大山町東黒牧上野遺跡A地区発掘調査概要』（1992.3）・②富山県埋蔵文化財センター『大山区都市建設に係わる埋蔵文化財試掘調査報告』（1991.3）・③大山町教育委員会「大山区都市建設に係わる埋蔵文化財試掘調査報告」（1989.3）を参考及び引用した。
- 16) 表1については、註15）に見える①・②の内に見える表を引用し作成した（一部修正）。
- 18) 大山町教育委員会「大山区都市建設に係わる埋蔵文化財試掘調査報告」（1989.3）内に、「外部から攻め寄せる敵から村を守る砦の役割をもつのではないかと考察する研究者も多い。」と記しているが、この堀は「牧」に関するものではないだろう。
- 19) 註6）の『大山町史』や『大山の歴史』でも指摘している。
- 20) 『延喜式』は、延長五年（九二七）に撰進された律令の施行細則である。
- 21) 『新訂増補 国史大系〔普及版〕延喜式 中篇』（吉川弘文館 1975.4）
右十箇国為第四番（辰戌年）
- 22) 『延喜式』卷二十三『新訂増補 国史大系〔普及版〕延喜式 中篇』（吉川弘文館 1975.4）
- 23)・27) 『国史大辞典 第八新』（吉川弘文館 1900.11）503頁。
- 25) 『続日本紀』慶雲四年三月甲子条、『類聚三代格』（貞観十八年正月二十六日格）等に記す。
- 26) 『続日本紀』文武天皇四年（七〇〇）三月丙寅の条、『続日本紀』慶雲四年三月甲子条、『延喜式』卷第廿八、『類聚三代格』（貞観十八年正月二十六日格）等に記す。
- 28)・31) 『富山県の畜産』（富山県経済部 1937.5）25頁。
- 29) 宇治谷孟氏『続日本紀（中）』（講談社学術文庫 1992.11）273頁。
- 30) 『新訂増補 国史大系〔普及版〕延喜式 中篇』（吉川弘文館 1975.4）592～593頁この『延喜式』にみえる牛皮について、藤井一二氏は、牧牛と密接な関係をもっていたものであろうと指摘されている。（『富山県史 通史編Ⅰ 原始・古代』（富山県 1976.12）同氏の「越中の産業と貢納形態」に記載されている。）
- 32) 『富山県史通史編Ⅰ 原始・古代』（富山県 1976.12）橋本芳雄氏の「荘園制の発展」593～598頁。
註28）と同書。同書の22～23頁。4節を考察する上で、鑄方貞亮氏の『改訂 日本

古代家畜史』（有明書房 1982.10）130～450頁内を参考及び引用した。今回の拙文において、『延喜式』からの引用については、鑄方氏の引用方法を随分参考にさせていただいた。

- 33) 『富山県の畜産』（富山県経済部 1937.5）の「畜産の史実」22～28頁の内。
- 34) 東黒牧の黒牧は、註8）でも記したように、上代の伝承に見える地名である。かなり古い地名であるが、同地の地名由来については、現在は詳細なことはわかっていない。
- 36) 山口英男「文献から見た古代牧馬の飼育形態」『山梨県史研究』（1994.3）
- 37) 安田初雄「古代における日本の放牧に関する歴史地理的考察」『福島大学学芸学部論集』10号
- 38) 一志茂樹氏の『信濃』24～5号で記されている「官牧考」に述べられている。
- 39) 藤田富士夫氏より、富山県内の馬歯出土遺跡についてご教示していただいた。
- 40) 同表は『富山県家畜表』（富山県知事官房 大正3年10月）の9頁に見える表を一部修正して引用した。